

浜嶋です。

## 母親世代タスクチーム概要報告（3／4）

第3弾です。

団会議及び団委員会で議論したいと思います。

ぜひ、続けて読んでください。

いいヒントが見つかると思います。

ご意見があれば、送ってください。

トークセッションのまとめ

### 9. 活動と保護者

- ・活動には保護者が積極的にかかわっている
- ・親は親で大変だけれども、行けば楽しい
- ・手が足りない時に声がかかるので、そのときは手伝いに行っている
- ・子どもたちの成長を見てほしい。無理しなくて良いというスタンス
- ・保護者に「親も経験して一緒に育っているんですよ」と言ってもらった
- ・その場に居ることで、スカウトの精神というものが理解できる。ビーバーとカブでは活動スタイルが全然違うが、見て知っていたので、上進して活動内容が変わっても抵抗がなかった
- ・褒めてもらってテンションの上がっている子どもを見たとき、こういう風に育てるべきだなという気付きがあった
- ・保護者は活動に参加しないイメージの団だった
- ・団には保護者に頼るちうスタンスがないので、関わりたくてもお手伝いできない。子どもがどのような活動をしているかは、子どもに聞かないと分からない
- ・兄弟うち一人でも家に残ると言うときも親も家に居ることになるので、なかなかお手伝いできない。支援できずに心苦しいと思う時期もあった
- ・お金を払ってお願いしますという、習い事的感覚の保護者がいることも事実
- ・団が小さく、保護者の負担も大きい
- ・ボーイスカウトはボランティアで成り立っているイメージはあったので、かかわりが必要なことはわかっていたが、大変だなと
- ・親のボランティア心をあおられた、子育てと活動を両立した
- ・上の子どもが参加しているとき、下の子は
- ・下の子どもまとめて面倒をみてくれた、仲間にしてくれた
- ・おんぶして連れて行った
- ・下の子どもがいれば、保護者がみんなでみている。保護者は自然とそう動いている（助け合

い、フォローしながら動いている大勢の保護者をスカウトも見ている)

#### 10. 活動を見て思うこと

- ・ローバースカウトの発表(23WSJ)や海外派遣の報告等を見て、「こんな風になってほしい」と思えた
- ・スカウト自身、23WSJで初めて世界中にスカウトがいるということを知った
- ・国際的な活動を含め「この先にあること」を、ビーバーやカブなどの世代のお母さんが知っていれば、もっと魅力的に感じて入隊につながるのでは
- ・ジャンボリーや海外派遣は、ボーイスカウトの中でも優等生が行くところだと思っている。どうすればその路線に乗れるのかわからない
- ・自分の子どもが、隊の中でそのような活動をして、どのようなポジションにいるのか、わからない。隊長を捕まえて聞いて良いのかもわからない
- ・母親は、下の子が小さいとそこに手を取られたり、単身赴任世帯だと母親一人でやることがいっぱいあるので、ボーイスカウトの活動に顔を出せない(入隊させられない)
- ・育メンのお父さんが多いので、せっかくの休みは家族で過ごすという共働きの家族が多いように思う
- ・長い目で見れば力はずくが、野球のように得点したなどの明確な結果が見えないので、魅力を感じにくいのではないかと思う

#### 11. 「入団前の知りたかったな」と思ったこと

- ・PTAみたいなものがあること
- ・お手伝いがあること
- ・子どもを「預けている」的感覚の親もいたが、習い事とは異なり親のかかわりも求められること
- ・資格がない人が指導者になっていると知った
- ・経験がないのに「デンリーダーになってほしい」「普通のお母さんで良い」と言われたときに、指導者は資格が不要なのかと知った
- ・子どもは「この隊長に一生ついていく！」と言っていたが、隊が変われば隊長(指導者)が変わることがあること
- ・指導者への勧誘があると知っていたら入っていなかったかもしれない。しかし、指導者になったことで、隊長にいろいろ自然と尋ねることができるため、保護者より不明に思うことが少なくなった。今は、指導者になって良かったと思っている。
- ・国際活動をしているのを入れてから知った。海外派遣の発表をするスカウトを見て、こんな体験ができるかも、こんな風になれるかもと感じた。知っていたら、上の子も入れたかった。

後1つです。次もお楽しみに！！